

ティリッヒ研究 現代キリスト教思想研究会

第 11 号 2007 年 3 月 57～64 頁

研究情報

学位請求論文 『初期ティリッヒ思想研究』要旨

近 藤 剛

は じ め に

この報告は、筆者が京都大学大学院文学研究科に提出し、審査を経て受理された学位請求論文『初期ティリッヒ思想研究』の要旨に基づいている（文博第 387 号、平成 19 年 3 月 23 日付け授与）。論文全体の概観のため、以下に目次を記載しておく。

目次

序論

第一節 ティリッヒ研究の現状

第二節 本論文の問題設定と方法論

第一章 初期ティリッヒの問題意識

第一節 ティリッヒとドイツ観念論の邂逅——フィヒテ解釈を中心に——

（１）ティリッヒとドイツ観念論

（２）初期ティリッヒのフィヒテ解釈

第二節 初期ティリッヒの思惟構造——＜一元論 - 二元論＞モデル——

（１）一元論的世界観と二元論的世界観の対立構図

（２）物質的・存在論的一元論から精神的・目的論的一元論への移行

（３）一元論と二元論の統合から高次の宗教的段階への移行

第三節 ＜一元論 - 二元論＞モデルに基づく神義論解釈

（１）神義論の問題

（２）二元論的・経験論的・悲観主義的領域における神義論

（３）一元論的・合理的・楽観主義的領域における神義論

（４）神義論からキリスト教的神思想の再構築へ

第二章 初期ティリッヒのシェリング解釈——神秘主義と罪責意識——

第一節 神秘主義と罪責意識のアンチノミー

第二節 前期シェリングにおける神秘主義の展開

- (1) 意志の神秘主義
- (2) 自然の神秘主義
- (3) 芸術の神秘主義
- (4) 知的直観の神秘主義
- (5) シェリングの転回

第三節 後期シェリングにおける神秘主義と罪責意識の総合

第三章 初期ティリッヒの教会弁証学

第一節 弁証学の背景

第二節 弁証学の目的

第三節 弁証学の方法

第四章 初期ティリッヒの組織神学構想

第一節 「弁証学」における神学的原理の措定

- (1) 絶対的立場
- (2) 相対的立場
- (3) 神学的立場

第二節 「教義学」における神学的原理の展開

- (1) 神論における逆説の展開
- (2) キリスト論における逆説の展開
- (3) 聖霊論における逆説の展開

第三節 「倫理学」から「文化の神学」へ

結論

附論 1 神学的原理の展開

第一節 プロテスタント的空虚

第二節 義認の減退

第三節 義認の逆説

附論 2 「懷疑者の義認」思想

第一節 懷疑者とは誰か

第二節 「懷疑者の義認」の理論的基礎

第三節 「懷疑者の義認」の神学的根拠

付録 『組織神学』(1913 年) 命題集

1．本論文の問題意識

ある思想の流れを発展史的に理解しようとする時、初期段階において意図された問題を明確化しておくことは重要である。何故ならば、初期に設定された思想的課題の変遷を解釈上のメルクマールとすることによって、その後の思想展開を俯瞰することができると考えられるからである。パウル・ティリッヒ（1886-1965）の思想解釈を試みる時、彼の多彩な思索活動（例えば、神学、哲学、宗教哲学、思想史、政治理論、芸術論、建築論、教育論、科学論、健康論、精神分析など）に応じて、研究対象は細分化されることになる。そうすると、個別的テーマの研究は可能になるが、思想の全体像を構成してティリッヒ思想に通底している根源的意図を理解することが困難となってしまう。そこで、その都度に拡散されていく彼の思想的関心を統一的に把握する視点が求められることになる。本論文は、そうした視点を模索する上で、初期ティリッヒ（第一次世界大戦までの思索活動期）の問題意識に注目し、とりわけ、哲学と神学の関係をめぐる初期の思想展開について考察する。

2．本論文の課題

今や、ティリッヒ思想をめぐる研究史の蓄積は膨大である。最近になってからも新たな研究書、叢書、論文集の刊行が後を絶たず、もはや一人の研究者がその全貌を捉えることはできなくなっている。そのような研究状況の中で特に指摘しておきたいのは、初期から前期（第一次世界大戦以後から 1933 年までの思索活動期）にかけての思想展開に対して関心が高まっている点である。その理由は、この時期の思索活動がティリッヒ思想の形成期として位置付けられ、彼の思想を全体的に理解し、また評価する上で、その解明が必ず要請されてくるものだからである。この時期には、哲学と神学の境界線上で思索する彼の学問的姿勢の濫觴や、体系構想を練成していく試行錯誤が見られる。また 19 世紀から 20 世紀にかけてのプロテスタント神学の問題状況（近代化・世俗化と宗教の関係）を理解する上で、この時期のティリッヒ研究は一つの有益な事例になると考えられる。思想史的に言えば、近代プロテスタント神学とドイツ観念論の錯綜した関係が如実に表れており、その解明を試みる上でも初期ティリッヒ思想は格好の題材になるであろう。

さらに、この時期に執筆された未公開の第一次資料が整備されてきたことも、研究者の関心を高める要因である。現在までに、批判的校訂版のティリッヒ著作集（MW）の出版が完結し、1925 年のマールブルク講義がヴェルナー・シュッスラーの編集により出版され、ドイツ語版ティリッヒ全集（GW）の補遺・遺稿集（EW）が刊行され続けている。補遺・遺稿集に含まれた講義録（例えば、ベルリン講義とフランクフルト講義）や多くの未公開草稿（例えば、本論文で重視される 1913 年の『組織神学』草稿など）の存在を全く無視して専門研究となすことは許されない

し、研究主題に関わるそうした第一次資料の検討なしに、その全容を解明することはできないと言えよう。要するに今後のティリッヒ研究では、未公刊草稿の出版によって思想解釈の精緻化が要求され、さらには従来の研究史で扱われることのなかったテーマが検討されねばならなくなる。本論文の課題は、このような研究状況を踏まえて設定されたものである。

本論文の目標は、初期ティリッヒの思想世界を哲学志向と神学志向の両側面から再構成すること、その中から彼の根本問題を明らかにすること、従来の研究史における資料的制約を補うことである。さらに、本論文の特徴は、未公刊草稿を公刊されたテキストに対する補助的なテキストとして消極的に扱うのではなく、それ自体を主たる研究対象として位置付けたということである。当然ながら、本論文では、そのような判断の妥当性が問われることになる。また、未公刊草稿の批判的読解によって、ティリッヒ研究における新資料の扱い方、著作としての重要度の判定などについて検討し、今後のティリッヒ研究の展望を開きたいと考えている。

3．本論文の方法論

ティリッヒの宗教思想においては、神と人間／世界の関係が問題にされることが多い。それは長らく彼の思想的課題とされてきたものである。本論文では、その発端を初期の思索に遡って見出すことができるのではないかと仮説を立てることから出発する。そして、先行研究の成果を考慮に入れて分析対象となるテキストを選定し、それらに対する批判的読解を進める。先ず、テキストの分析の中から、ティリッヒ思想の解釈に必要と考えられる枠組を取り出していく。次に、取り出された幾つかの枠組を時系列的に列挙することで、思想発展の軌跡を描いていく。それらの整合性を具体的に考察していけば、初期の中心的な問題意識が浮き彫りにされるはずである。また、その作業によって、本論文の仮説も批判的に検証することが可能となろう。以上の方法論を確認した上で、研究内容を具体的に説明していきたい。

本論文が重視するテキストは、「一元論的世界観と二元論的世界観の対立はキリスト教的宗教にとって如何なる意義を持つのか？」(1908年)、神学学位論文『シェリングの哲学的発展における神秘主義と罪責意識』(1912年)、『組織神学』(1913年)である。これらのテキストは神と人間の間をめぐり「宗教的アンチノミー」という問題——「神秘主義と罪責意識、絶対者との統一性の感情および神との対立性の意識、絶対的精神と個別的精神の同一性および聖なる主と罪ある被造物との矛盾相剋の経験。即ち、これこそ、宗教的思惟が教会の全時代にわたってその解決を求めて努力してきた、そして常に繰り返し努力していかなばならないアンチノミーなのである」(Tillich, 1912, S.28-29)——を共有しており、その解決をモチーフとした<一元論的世界観—二元論的世界観—宗教的段階(義認、イエス・キリスト)>、<神秘主義—罪責意識—神の人格化>、<絶対的立場(直観)—相対的立場(反省)—神学的立場(逆説)>というシェーマを

打ち出している。これら三つのシェーマの関係性を明らかにすることが、初期ティリッヒ思想の解明に資するのみならず、彼の根本問題の解明にも裨益するものと考えられる。

4．本論文の内容

本論文の前半部分では、初期ティリッヒの思想的背景を探りつつ、彼の問題意識を明らかにする。「宗教的アンチノミー」の解決という発想そのものに、哲学と神学の関係論（相関）をめぐるティリッヒの知的関心が介在しており、ドイツ観念論に基づく思考方法が反映されている。そのため、第一章「初期ティリッヒの問題意識」では、彼の哲学的背景の究明、並びに彼の思惟形式の分析を行う。先ず、ある程度まで評価の定まっている公刊論文であることを考慮して 1927 年の書評論文「キリスト教と観念論——議論の現状を理解するために——」を取り上げ、ドイツ観念論に関するティリッヒの基本的理解を明示する。それを確認した上で、1906 年の未公刊草稿「ヨハネ福音書との関係におけるフィヒテの宗教哲学」を中心とした初期ティリッヒのフィヒテ解釈を扱い、ドイツ観念論の受容について考察する。次に、未公刊草稿「一元論的世界観と二元論的世界観の対立はキリスト教的宗教にとって如何なる意義を持つのか？」から抽出できる＜一元論—二元論＞モデルの内容を検討することにより、初期ティリッヒの思惟構造を分析する。第二章「初期ティリッヒのシェリング解釈」では、神学学位論文『シェリングの哲学的発展における神秘主義と罪責意識』の読解に基づき、＜神秘主義—罪責意識—神の人格化＞というシェーマの内容を明らかにしつつ、ティリッヒによるシェリング解釈の特徴を指摘する。

後半部分では、これまでに殆ど知られることのなかった初期ティリッヒの組織神学構想の内容を検討する。第三章「初期ティリッヒの教会弁証学」では、『組織神学』の序論的意味を有すると考えられる『教会弁証学』（1913 年）を手掛かりにして、組織神学構想の意図を推測する。ここでは、ティリッヒを取り巻く時代的背景（とりわけ教養市民層との関わり）についても詳しく考察する。第四章「初期ティリッヒの組織神学構想」では、『組織神学』の内容を「弁証学」、「教義学」、「倫理学」の部門別に詳解し、構想の全貌を明らかにする。その中でも重点的に取り上げられるのは、「弁証学」である。というのも「弁証学」では、＜絶対的立場（直観）—相対的立場（反省）—神学的立場（逆説）＞のシェーマが論じられており、そこに初期ティリッヒ思想の集大成が表れていると考えられるからである。また、「倫理学」から「文化の神学」への展開についても言及し、この『組織神学』草稿の意義を示したい。

附論では、初期から前期への発展経路を辿るため、前期の「懷疑者の義認」思想に焦点を当てる。というのも「宗教的アンチノミー」の解決はティリッヒ思想の根本問題として様々な形で発展していくことになるが、その解決の一つの形としては、特に前期の義認論解釈に収斂されると考えられるからである。前期の義認論解釈の中に初期ティリッヒの「神学的原理」の展開を読み

込めるというのも、本論文の仮説の一つである。従って、附論では、その妥当性の検証作業が行われる。附論1「神学的原理の展開」では、第一次世界大戦以降の精神状況、および「プロテスタント的空虚」といったティリッヒの状況認識について触れながら、カトリシズムやリッチェル神学の義認論解釈との対比においてティリッヒの論争的立場、あるいは独創性を見出す。附論2「「懷疑者の義認」思想」では、前期ティリッヒの「懷疑者の義認」思想を綿密に読解する。

5. 本論文の成果

初期ティリッヒの問題状況に限定して哲学と神学の関係を説明するならば、第一に両者の関係は論理的な問題として、つまり、神学的言明の妥当性を反省するためにはキリスト教信仰の適切な哲学的解釈が欠かせず（ティリッヒはリッチェル神学に反して形而上学に基づく哲学的世界観の援用を主張した）、当時においては観念論的思惟との関係が不可避であったと説明される。第二に両者の関係は弁証論的な問題として、即ち、教会外にいて宗教を軽蔑する教養市民層に対してキリスト教的信仰の真理性を弁証するためには、観念論的概念の援用は必要不可欠であったと説明される。初期ティリッヒはドイツ観念論の影響下で思索を進めていく中で、「宗教的アンチノミー」の解決に資するシェーマを考案した。それがティリッヒの思惟構造を規定することにもなる＜一元論的世界観—二元論的世界観—宗教的段階（義認、イエス・キリスト）＞という第一のシェーマである。これは思想史的な分析から取り出された一つの解釈モデルであり、その方法論は後年に見られるティリッヒの手法（広範な思想史的考察に裏打ちされた理論の構築）を先駆けて示すものと言える。神学学位論文では、当時としては目新しいシェリング解釈（積極哲学は単に消極哲学を否定するものとして出てきたものではないという解釈。つまり、積極哲学は消極哲学で準備された諸概念を前提して展開されたものであり、両者の相補的な関係がシェリング思想をトータルに把握することに繋がるという解釈）を提示したのみならず、＜一元論—二元論＞モデルを補強する第二のシェーマの導出に成功している。それは＜神秘主義—罪責意識—神の人格化＞というシェーマであるが、シェリング哲学の厳密な解釈に裏付けられているという点で、論理的により精密化されたものと言えるであろう。さらに、ティリッヒは上述した二つのシェーマを発展させた第三のシェーマとして＜絶対的立場（直観）—相対的立場（反省）—神学的立場（逆説）＞を案出し、その導入による『組織神学』体系を構想した。彼の組織神学においては、そのモチーフとして「宗教的アンチノミー」の解決が中心に据え置かれていると考えられる。そのことから、彼の組織神学では救済論的な意図が前面に打ち出されていること、キリスト論が体系の中心に位置付けられていることも了解可能となる（ティリッヒによれば、キリスト論の機能は救済論であると考えられているが、この発想は後期『組織神学』まで継続されている）。このようにして「宗教的アンチノミー」の解決を求めていくシェーマは、思想史的分析とシェリング

研究を経て、ついに独自の思想展開（オリジナルの組織神学構想）に結び付いたと結論できる。

三つのシェーマは、それぞれ次のような対応関係を有しており、初期ティリッヒ思想の一貫性を証するものであると言える。つまり、一元論的世界観は神秘主義と絶対的立場（直観）に、二元論的世界観は罪責意識と相対的立場（反省）に対応し、両者の対立（宗教的アンチノミー）は宗教的段階で、シェリング思想で言えば「神の人格化」を通して、あるいは『組織神学』で提示された神学的立場（逆説、義認、イエス・キリスト）において解決されると考えられる。このような枠組は一種の弁証法的構造であると言えるが、端的に言うと、そこに表れているのは＜対立における逆説的な統一＞という論理である。この論理はティリッヒ思想の前提とも呼ぶべきものであり、後々まで繰り返し登場することになる。

『組織神学』草稿の存在は、シェリング研究の圧倒的な分量によってこれまで哲学志向と見なされがちであった初期ティリッヒのイメージを変え、神学的関心の高さを如実に示すことになった。このことは未公開草稿という新たな資料を分析したことによって判明したことであり、従来の研究史における不備な点を補うことができたと言える。要するに、ティリッヒは思索の当初から哲学と神学の関係（相関）に関心を寄せていたのであり、ここからここまでの時期が哲学志向もしくは神学志向であると、限定あるいは分断して捉えることはできないということである。その点に関連して、初期ティリッヒにおける哲学と神学の関係について言及しておきたい。『組織神学』における哲学と神学の関係は、「弁証学」と「教義学」の関係に重ねて考えることができる。原理を学的に定式化する哲学は、神学的原理を指定する「弁証学」の課題を担っている。その原理を体系的に展開する「教義学」が、神学に特有の内容を構成している。『組織神学』の内部には「弁証学」としての哲学と「教義学」としての神学があり、哲学と神学は不可分の関係を保っている。つまり、原理の指定とその展開は分かち難く結び付いている。その意味では、哲学と神学の関係は相補的であり、ともに真理の解釈に従事することが求められる。また、そのように考えるならば、『組織神学』では、体系として考えられている神学と、実質的には教義学として表されている神学というように、「神学」そのものが二重化していると言えるかもしれない。実は、この構造は後期『組織神学』にも見られるものである。後期『組織神学』は、問いの形式化を行う哲学とそれに答える神学（問いと答えの相関）を体系の内部に含むことによって形成されている。この場合も「神学」は二重化しており、哲学と神学は明らかに相補的な関係として捉えられている。つまり、このようなティリッヒの組織神学の構造は、思索の当初から見られる彼の特徴であると指摘できる。

『組織神学』や他の草稿を読解することによって、ティリッヒの思想的背景を明らかにすることができた。これも未公開草稿の分析による一つの成果であろう。初期ティリッヒはドイツ観念論から「知的直観」に代表される基本的なターミノロジーを受容し、ヘーゲル的な体系論の手法も取り入れたと考えられる。しかしながら、彼はドイツ観念論の演繹の体系においてキリスト教

的真理を十全に説明できるとは考えなかった。観念論的な思惟の枠組を活用させつつも、論理的な演繹によるキリスト教的真理の把握に対して批判を向けたところに、初期ティリッヒの特徴を指摘することができる。むしろ、キリスト教的真理は飛躍や恣意といった不合理的な要素を取り込む形で説明されなければならないのであり、その考え方が逆説概念の提示につながり、ドイツ観念論とは異なる方向性（積極的に評価すれば、ドイツ観念論を乗り越える方向性）へ向かわせていくものと考えられる。未公開草稿の意義という点では、『組織神学』『倫理学』も重要である。というのも、そこで取り扱われた論点が「文化の神学」への布石であることが明らかにされたからである。初期から前期へ至る思想発展の解明の糸口が未公開草稿によって得られたことは、銘記されてよいであろう。ただ、初期において意図されながらも、果たされなかった問題もある。それは、神学体系を諸学の体系に組み入れることによってキリスト教的真理を弁証するという試みである。『教会弁証学』において提起された「神学体系を学の体系一般に方法論的かつ内容的に組み入れること」という問題意識は、それに続く『組織神学』に受け継がれた。しかし、そこで実際に行われたことは、学的に基礎付けられた原理（直観と反省が要求する逆説という原理）によって神学体系を構築することであって、神学体系そのものを諸学の体系に組み入れることはなかった。「弁証学」では諸学の体系論が論じられているものの、神学を含んだ諸学の体系を扱うまでには至っておらず、その点では不十分であったと言わざるを得ない。しかし、その課題が前期において果たされたことは、『対象と方法に従った諸学の体系』の内容を見れば分かることであり、思想発展において変わるものななかった問題意識が初期の思索に起因していることを理解しておく必要がある。いずれにせよ 1913 年の『組織神学』は、熟考された内容を備えた著作として評価することができ、その後のティリッヒ思想が展開されていくにあたっての一つの土台を成すものであると結論付けることができる。この草稿が未公開のままであったからと言って、その内容も暫定的なものであると片付けることはできない。従って、今後のティリッヒ研究では、その他の多くの未公開草稿を読解し、その内容を精査していくことが求められるのである。

『組織神学』『弁証学』において集中的に考察された神学的原理としての逆説は、初期の思索の大いなる成果として捉えることができる。この逆説概念は、後の思想展開においても重要な役割を果たしていく。例えば、前期では宗教哲学、教義学、義認論、後期では組織神学体系、キリスト論といったように時々の問題領域において応用され、さらに時々と思惟形式において定式化され続けている。逆説概念の扱い方には、応用される主題に即した差異は認められるものの、内容的には一貫していると考えられる。そのことから逆説をティリッヒ思想の中心概念として位置付けることも可能になるのではないかと推測される。

（こんどう・ごう 神戸国際大学 / 神戸松蔭女子学院大学
四天王寺国際仏教大学 非常勤講師）